

村落開発ボランティア補完研修への協力

NPO 法人「自然塾寺子屋」は、「地球上の大事な資源を、共生・共存の思想で次世代に引き継いでいく」ことを基本ミッションに、さまざま意欲的な活動を展開されています。JOCV 隊員への技術補完研修も、継続的に実施されている有意義な活動の一つです。今般、取り組まれている平成 21 年度 3 次隊「村落開発隊員」補完研修の参加者は 6 名（女性 4、男性 2）、派遣国もウガンダ、ボリビア、ケニアと多様です。各任地では、村落開発業務とはいえ各隊員とも農業・農村面での利水管理に係ることになりそうで、研修テーマも「水管理」を中心に組まれることになりました。2 週間の研修では、「寺子屋」ならではの「地元の協力」を得ながら、甘楽多野用水土地改良区での見聞や実習なども盛り込み、これまで農業や灌漑に触れることのなかった研修生の実情にも十分配慮したプログラムとなっています。



土地改良区の方から説明を受ける研修生ら

AAI からは、「灌漑一般」講義を担当させていただきました。まず、講義内容を準備する段になって考え込んでしまいました。「今時の若者に[灌漑]?、そもそも[灌漑]の漢字は読めるだろうか?」。「灌漑」は、各古代文明発祥の契機ともいわれるほど、我々人類にとって長く身近な生業でありながら、そして現代でも重要な生存技術でありながら、あまり注目されることはありません。「灌漑」の全貌、そして昨今の実情などをどう説明したらうまく伝えられるか、大いに悩むところです。

「灌漑」は、「農業を行う上では、どうしても追加的に水分調達を行う必要が生じることがあり、それを充足させる一連の人為的活動」ということでしょう。しかし、「だから灌漑が必要なのは当然」としていきなり説明を始めるのはかなり不親切。まず、「作物は、水がなければ生きられない」という自然の大前提から説いた方がよいと考えました。さらにいえば、

何といっても作物の水分補給には「降雨」が基本です。人類は、まず「降雨」現象に適った農業を考えてきました(天水農業です)。そこで「もっと雨量を増やしたい、もっと要るときに降って欲しい」という要求が切実になって、「灌漑」が始まった…、これらの灌漑進展の経緯も強調することにしました。

「灌漑」を安定的に続けようとするれば、水を制御するための何らかの物理的装置が必要になってきます(灌漑システムです)。その際にも、これから「灌漑」を切実に始めたい農家の立場を想像して、まず「自分ならどうしようか」と困ってみる。そうすれば、周辺に在るであろう様々な水資源の可能性やコストに気を配りながら、何戸くらいの農家がどのように参加するシステムにするか、どのくらい便利で安心なシステムにするか、を判断していかなければならないかが実感できるでしょう。そこで、灌漑便益を念頭に置きながら灌漑システムの灌漑規模や整備水準などをどう決めていかに触れた「灌漑の経済学」を説明することにしました。

ところで、経済的には十分妥当とされ造られた既存灌漑システムでも、運営・維持管理で様々な苦勞に直面しているのが現実です。研修講義では、それらの現教訓も聞いてもらいながら、灌漑システムの在り方は、経済的妥当性のみならず、社会的配慮が重要なことにも触れていきました。そして、社会的に健全な灌漑運営を考える場合には、関係農家集団の凝集性の高さなどからより小規模な灌漑システムがさらに有利で、最近では「小規模灌漑システム」に注目が集まっている現状を説明しました。あわせて、灌漑に係る集団行動を持続的に進めるには、参加型アプローチが有用だとする最近の動向にも触れました。

このような流れにそって、灌漑全般に関する今回の研修講義を進めてみました。途中、俄かの夕立ちで、急遽、洗濯物を取り込むハブニングもありましたが、約 2 時間半の講義も、研修生の興味を比較的持続しながら無事終わることができました。社会科学系など幅広いバックグラウンドを有する研修生の方々を対象にすることで、広く「灌漑」全般に配慮することの大切さに気づかされる研修でした。今回の研修講義は、実は我々自身の勉強でもあったと感じているところです。

(松島修市)